佐藤勢紀子（さとうせきこ）

学位の種類	博士（文学）
学位記番号	文第171号
学位授与年月日	平成13年2月1日
学位授与の要件	学位規則第4条第2項該当
学位論文題目	**『源氏物語』の仏教思想**
論文審査委員	（主査） 教授 玉懸博之　教授 仁平道明 教授 佐藤伸宏

論文内容の要旨

一　研究の目的

本研究は『源氏物語』における仏教思想のあらわれについて思想史学的立場から考察し、この物語が書かれた平安時代中期の人々の仏教に根ざした人生解釈のありようを解明することを目的としている。

物語の作中人物に託された思考・感情のどの部分がどれほどに時代思潮を反映したものなのか、作者の個性がどのようにそれらに影響しているのかを見定めるのは至難であるが、それらが時代人一般の心思のありようと作者のそれの複合体であることを承知した上で、この物語の文面に何が書かれているのか――どのような思考・感情が、どのような相互連関において、どの程度に強調されているかを明らかにしておくことは、無意味なことではないだろう。従来の『源氏物語』の仏教思想に関する研究においては、そうした基礎的な作業さえ十分に行われているとは言いがたいからである。これまで、そのような基礎作業を体系的・網羅的に行ったものとしては、重松信弘氏の『源氏物語の仏教思想』があり、実証的な手法による手堅い研究成果を示している。しかし、同書は、『源氏物語』の仏教思想のあらわれを文芸的感興の創出という観点から捉えていること、無常、宿世、罪業という三大仏教思想のあらわれについて個別に詳論しているがその相互の関係が考察されていないこと、この物語において重要な意義を持つと考えられる方便の思想が軽視されていること、の三点より、思想史学的見地から見れば多くの研究課題を残していると言える。

そこで、本研究では、『源氏物語』の作中人物の人生解釈に大きく関わっていると見られる無常、宿世、方便の三つの仏教思想をとりあげ、物語の中でこれらの思想を反映する思いが共

存している叙述に着目し、それらについていくつかの問題提起を行った上で、三つの思想の相互連関の仕方を解明することとした。第一部でその前提的考察を行い、第二部で、宿世の思想と方便の思想を中心に、『源氏物語』にあらわれた仏教思想の考察を行った。

二　研究の概要

第一部（第一章～第三章）では、本研究の前提的考察として、光源氏の物語談義の形で書かれている蛍巻の物語論をとりあげ、作者が物語を書くという行為を仏教思想との関わりにおいてどのように捉えていたかを追究した。蛍巻物語論は、その論末に、

> 仏の、いとうるはしき心にて説きおきたまへる御法も、方便といふことありて、悟りなき者は、ここかしこ違ふ疑ひをおきつべくなん、方等経の中に多かれど、言ひもてゆけば、一つ旨にありて、菩提と煩悩との隔たりなむ、この、人のよきあしきばかりの事は変りける。よく言へば、すべて何ごとも空しからずなりぬや。

と、仏法論を導入して物語創作の意義づけを行っているが、この仏法論の部分については、中世の古注釈の付会に満ちた天台教学的解釈に対する忌避感が残存しているためか、いまだ十分な検討が行われておらず、不明な点が多い。

第一部第一章では、この仏法論の中の「人のよきあしきばかりの事」という句と直前の「菩提と煩悩との隔たり」という句の関係を論じ、諸先学の、「よきあしき」を切り離して「善」・「悪」とし、それぞれを「菩提」と「煩悩」に比定する解釈が仏教的発想にとらわれた誤釈であることを述べた。さらに、ここで「煩悩即菩提」という天台教理を背景として人の世の真実相と「よきあしきばかりの事」（誇張された物語叙述）の相即が論じられていることを明らかにし、この仏法論が仏教で言う「譬喩説」として物語創作の「空しから」ざることを説く物語論の叙述を支える役割を果たしているという結論を導いた。

続いて第二章では、この仏法論において「方便」が多いとされている「方等経」とは何を指すかという問題設定にもとづき、仏法論の思想的源泉の究明を試みた。当時の文献における「方等経」という語の用法を調べた結果、ここの「方等経」は現在ほぼ定説となっている大乗経典一般の意ではなく、天台宗の五時判でいう方等時の経典の意であることが明らかになった。そこから、『法華玄義』において方等時の解説に用いられている「一音説法」の教理がこの仏法論全体の背景にあること、さらにこの「一音説法」の教理と関わりを持つ『法華経』薬草喩品の所説が仏法論の典拠となっている可能性があることを新たに示した。仏法論の背後に天台教学の思想があるとした点では古注の説に同調する結果となったが、本研究では、このことはあくまでこの仏法論の物語論を支える「譬喩説」としての有効性を示すものであると捉えたい。

ここまでは仏法論の「譬喩説」としての役割に注目してきたが、第三章においては、蛍巻物語論において仏法論が導入されていることの実質的な意義を考えた。まず、平安末期から「狂言綺語」の仏教的文芸観をふまえて『源氏物語』作者としての紫式部の功罪が問われるようになったことに着目し、式部自身は物語の創作を行う上で仏教の文芸否定についてどのように考えていたのかという問題を提起した。その上で、『三宝絵』等の検討を通じて、紫式部在世当時、物語を狂言綺語であるとする見方が既に存在していたことを論証し、蛍巻物語論における仏法論の導入は、物語創作が狂言綺語であるという仏教的見地からの批判を免れるために、同じ仏教の「方便」説を援用して論の正当化を図ろうとしたものであるという見解を提示した。

以上、第一部では、蛍巻物語論の検討を通じて、作者が物語創作と仏教思想をどのように関

連づけていたかを考察した。ここで、物語の創作を意義づけるために、仏教の方便の思想が援用されていたことが特に注目される。

次に、本論文の第二部では、『源氏物語』全体に見られる様々な仏教思想の表徴に着目し、本研究の目的とする、『源氏物語』述作当時の人々における典型的な人生解釈のありようの解明を試みた。第二部をさらに第一編と第二編に分け、宿世の思想と方便の思想をそれぞれの中心テーマとした。

第一編（第一章～第七章）では、宿世の思いを主たる研究対象とし、その無常の思いとの関わりについて考察した。まず、第一章において、『源氏物語』における宿世の思想の研究史を概観するとともに、無常の思想については先行研究が少なく、この物語の宿世と無常の関連を扱った例もほとんどないことを指摘した。さらに、『源氏物語』の本文から宿世の思いと無常の思いが共存している例を引き、いくつかの問題を提起して、本編における考察の起点とした。特に、帚木巻の「女の宿世はいと浮びたるなんあはれにはべる」という叙述は、文脈から宿世の思いと無常の思いを同時に含むことが知られるが、難解であり、その意味を解き明かすことが宿世と無常の関係の究明に役立つと考えられた。

第二章では、『源氏物語』を含む平安時代の六つの物語をとりあげて宿世の思想のあらわれについて検討し、「宿世」「契り」「さるべき」等の定型表現以外にも宿世の思いを表す言い方があることを指摘した。すなわち、筆者が「宿世の文脈」と命名したところの、文脈の中に宿世の思いが読み取れる例である。「宿世の文脈」の多くは、「さるべき」の「べき」に準ずる用法での「べし」もしくはその否定形「まじ」の用例であって、そうした「宿世の文脈」の物語における出現頻度は時代が進むにつれて高まる傾向にある。また、この「宿世の文脈」においては、宿世の業因が現世の過去から現在へ、現在から未来へという時間経過の中での物事のなりゆきをまるごと支配しているという発想が顕著に認められた。この宿世による現世の時間支配の意識は、人生のなりゆきを持続の相のもとに捉えさせるものとして、平安中期以降の人々の思惟様式を大きく特徴づけていたと考えられる。

第三章では、まず、『源氏物語』に見られる宿世についての一般論に着目し、この物語が表明している宿世観について検討した。その結果、宿世の性格として、その捉えがたさと抗いがたさが強調されていることがわかった。ただし、後者の宿世の抗いがたさ（絶対性）ということは、仏教本来の因果の思想のあり方と絡んで、『源氏物語』の宿世思想の研究史上一大論点となっているところで、『源氏物語』において宿世が人間の意志によって変更可能とされているかどうかが問われている。この問題について、変更可能とされているとする先行研究の所説を検討し、物事のなりゆきの決定に人間の意志のはたらく余地は認められているが、それによって宿世の変更が可能であるとはされていないという見解を示した。この結論は第二章で論じた宿世の現世支配のあり方に通じるものである。

ここで、第一章で提示した帚木巻の「女の宿世」についての叙述を再びとりあげ、その解釈を示した。「宿世」が「浮びたる」という言い方は形容矛盾に見えるが、ここでの「宿世」は宿命というような抽象的概念ではなく、現世において前世の業が紡ぎだす諸現象の総体としての様相――宿命的に定められた人生の具体相という意味において捉えるべきであることを述べ、この叙述では、宿命的に定められた女の人生が無常の相貌をまとっているという意味において宿世と無常の思いが関連づけられていることを明らかにした。

続く第四章では、この物語において女性の宿世が特別の関心を以て扱われているということ

に注目し、まず、宿世の思いの主体と客体について定型的宿世表現の全用例を調査して、男性登場人物が宿世を思う傾向が強いのに対し、女性はその宿世を思われる傾向が強いという結果を得た。ここで、なぜ自らの宿世を頻りに言われている女性に宿世の思いが希薄なのかという疑問から、女性登場人物の宿世の思いを仔細に検討したところ、多くの主要人物において「憂き身」の意識が宿世の思いと共起していることがわかった。この「憂き身」意識は男性登場人物にはほとんど見られぬものである。次いで、「憂き身」「身の憂さ」「身……憂し」等の「憂き身」表現にあらわれた「憂き身」の思いを検討し、これらが、表現上の連絡、契機の類同性、想念自体の性格の共通性から言って、宿世の思いに根ざすものであるという結論に達した。これらの「憂き身」表現こそは宿世の思いを表すほぼ女性特有の表現であると考えられる。「宿世」「契り」「さるべき」等の定型表現のみに宿世の思いの発露を認めていた従来の研究では見ることができなかった宿世の思想の新たな一面がここに発掘された。

第五章では前章に引き続き「憂き身」意識の検討を行い、「憂き身」と「憂き世」を連続的に捉えていた先行研究の見方に反し、これが「憂き世」意識とは本来別系統の概念であることを明らかにした。すなわち、「憂き世」意識が無常の思いと深く関わっているのに対し、「憂き身」意識は宿世の思いに根ざすものである。さらに、「憂き世」意識が出家志向につながるのに対して、「憂き身」意識がきわめてしばしば当事者の自己消却の願望を喚起することを見出し、この物語最後の女性主要人物である浮舟が終始「憂き身」の自覚と自己消却願望を持ち続け、最終的には「世に身を棄てられて」ある存在の仕方を選択していることを指摘した。

第六章では、浮舟をめぐる考察をさらに深め、その人物造型のあり方、浮舟物語に用いられた妻争い説話の話型、また宇治十帖執筆開始時に既に存在したと見られる中君入水構想から、宇治十帖の執筆目的が「憂き身」にして「浮き身」なる――さすらい続ける宿命を負わされた――女の人生を描くことにあったという見解を提示した。当時「憂き身」と「浮き身」は歌語として定着していたが、両者は単なる同音異義語であることを超えて、宿世と無常によって性格づけられた女の人生のありようを相補的に示すものであり、前掲の「女の宿世はいと浮びたる」という言い方の真意を解き明かすものとして注目される。

本編最後の第七章においては、まず、『源氏物語』の「憂き身」表現を、引き歌によるものまで含めて抽出し、分析を行った。その結果、「憂き身」の自覚を持ち自己消却の願望を抱く直接的契機として、「人笑へ」なることへの危惧――恥の意識があることが判明した。次に、『紫式部日記』の回想の叙述における「憂き身」意識の表出を手掛かりに、この日記における「思ひ知る」という語の用例をとりあげて検討し、そこに強い恥の意識と自己消却願望が認められることを指摘した。これより、浮舟をはじめ『源氏物語』の女性登場人物に見られる「憂き身」意識と自己消却の願望は作者自身の強烈な「身」意識によって強調されたものではないかという推論を導いた。

第二部第二編（第一章～第三章）では、方便の思いをとりあげ、その、無常の思い、宿世の思いとの関係の仕方を中心に考察した。『源氏物語』における方便の思いの出現度数は無常や宿世の思いに比してはるかに少ないが、その思いの主体となっているのがいずれも主要人物であること、また、彼らが自らの人生を顧みて総括的な判断を示す場面での思いであることから、その重要性が知られる。また、本論文の第一部で見たように、方便の思想は物語創作についての作者の考え方にも大きく影響していた。この物語は、いわば、二重の意味で方便の思想に支えられている。にもかかわらず、従来の『源氏物語』研究において、方便の思想が正面からと

りあげられ集中的に論じられた例がほとんどないことは、理解しがたいことである。

第二編の第一章では、この物語における「方便」という語の三つの用例の中から、登場人物の人生解釈と最も深く関わる例として、蜻蛉巻の薫の思いの中の用例をとりあげ、これを中心に、宇治十帖の主要人物に見られる方便の思いの基本的性格と思想的源泉について考察した。その結果、宇治十帖において、方便の思いは仏が衆生の発心を促すために無常を思わせるという形で意識されていること、また、その思想的源泉としては、従来あげられてきた『法華経』如来寿量品の方便説よりは、『法華経』随喜功徳品や『大日経』三句の方便説がふさわしいことが明らかになった。特に、『大日経』の影響の可能性があることは、『源氏物語』の背景に密教の思想があることを示唆するもので、『源氏物語』の思想基盤をほぼ天台浄土教に求めている先行研究ではほとんど論じられていないこととして注目に値する。

次に第二章では、『源氏物語』正編の主要人物である光源氏の晩年の方便の思いに着目し、この源氏の方便の思いと宇治十帖の薫や八宮の方便の思いとの異同を論じた。まず、共通点としては、男性主要登場人物における思いであること、世の無常を思わせるという形で方便がなされていること、方便を行う主体が明記される場合には必ず「仏など」と記されていることなどがあげられた。一方、相違点としては、宇治十帖において仏の方便の促しがより直接的になっていること、また、特に薫において、仏による人間の生き方への能動的対応が見られるようになること、の二点が注目された。第二の点に関連して、正編の源氏においては、自らの宿世が仏の方便によってあらかじめ定められていたという解釈が見られたが、続編の薫においては、宿世の思いと仏の方便の促しの思いは別々に意識されるものとなっている。これらの方便の思いにおける相違点は、『源氏物語』正編から続編にかけての仏観の変容をうかがわせるものである。変容が生じた理由は定かではないが、紫式部が教えを受けた可能性が指摘されている檀那贈僧正覚運の思想の影響が想定される。覚運の著作とされる『念仏宝号』には、当時としては新しい考え方である久遠弥陀の思想が見られ、これが覚運の真撰であるとすれば、『法華経』本門重視の傾向が強まる中で、覚運は「顕密教主」(『念仏宝号』) たる仏の常在不滅なることを強調していたと考えられるからである。

第三章では、『源氏物語』最終帖の夢浮橋巻で横川僧都が浮舟にあてた消息をとりあげ、そこに方便の思想が潜在している可能性を指摘した。この消息が出家した浮舟に対して還俗を勧めているか否かという点については、これまで大きく見解が分かれていた。全体の文脈からは、古注釈が述べているように、還俗勧奨と見るのが適当であるが、消息文中の「(薫の) 愛執の罪をはるかしきこえたまひて」という一節が、還俗勧奨と見たのでは理解できない——つまり、還俗して薫ともとの夫婦関係を持ちながら「愛執の罪をはるか」すことは不可能だという見地から、多くの論者により非勧奨説が唱えられてきた。しかし、前章までの考察で明らかになったように、宇治十帖の主要人物においては、方便の思い——特に密教の思想に根ざす方便の思いが濃厚である。そして、横川僧都という人物が天台僧の中でも密教に造詣の深いすぐれた加持僧として描かれていることを考えると、横川僧都にも方便の思想があったのではないかという推論が導かれる。実際、『大日経』の注釈書として天台宗で依用されていた『大日経義釈』には、「菩薩」が「大悲方便」として不邪淫戒を破り、折を見て相手を勧導し、やがては共に「大法利」を成したという例話が見られる。横川僧都はこの話を念頭において消息を書き、浮舟に在家の「菩薩」となって——還俗して——方便を行じ薫と共に成道をめざすことを勧めたのではないかと考えられる。

三　研究の成果

以下、本研究が解明をめざした人生解釈のありようについて明らかになったことを中心に研究の成果を記す。特に男性貴顕と女性の違いに着目し、それぞれの人生解釈における思考パターンの特徴を述べる。

本研究では、宿世の思想について、これまで研究対象となっていた定型的表現とは違った新たな表現形態として、「宿世の文脈」および「憂き身」表現を見出した（第二部第一編）。「宿世の文脈」の検討によって、宿世の業因が現世の時間経過をまるごと支配しているという発想により、時間の流れが持続の相のもとに捉えられていることがわかった。過去から現在に至る人生のなりゆきにおいて、物事の持続を意識したときに、それが自分の宿世であると認識する思考パターンがしばしば認められるが、その一つの典型的な形として、無常の思いの反復に我が身の宿世を思う例がある。これは特に源氏、薫などの男性貴顕にあらわれるパターンで、無常を「知る」べき「身」という形で宿世が自覚される。

一方、女性にとっての無常と宿世の接点は、何よりも「憂き身」意識にあった。「憂き身」は即ち「浮き身」であって、そこに、女性の人生解釈の典型的なパターンが認められる。すなわち、さすらい続ける宿命を持つ我が身という自己認識があり、恥の意識等によってさらにそれが極まれば、自己消却の願望がそこに生ずるのであった。つまり、女性は男性と違って、無常を「知る」と言うよりは、我が身において体現していたのである。

このように、同じ無常と宿世の思いの共存といっても男女の意識の仕方に違いがあるが、持続の相を持つ時間意識と「身」に集中する意識のあり方は、ともに宿世の思いに根ざすものとして、当時の人々の思惟様式を大きく特徴づけるものであったと思われる。

本研究ではまた、これまで軽視されがちであった『源氏物語』の方便の思想に着目し、重点的に考察した。第一部では、方便の思想が、作者の物語創作の意義づけに用いられていることを見た。また、第二部第二編の作中人物の方便の思いについての考察では、物語の主要人物の人生解釈において、この方便の思想が重大な役割をはたしていることを確認した。『源氏物語』は、内外の両面から方便の思想に支えられている。

物語の中で、方便の思いは、無常や宿世の思いと絡んで、男性主要人物の人生解釈の型を形成している。方便の思いは男性貴顕のみに見られるものであるが、これは仏の方便が特別の救済のはからいであって、劣機とされる女性や身分の低い男性には意識されにくいものであったことを示していると考えられる。

方便の思いと無常や宿世の思いの関係の仕方を見ると、まず、方便と無常については、両者の思いはつねに不可分である。すなわち、この物語においては、仏の方便は、仏が衆生の発心を促すために世の無常を思わせるという形で意識され、これが一つの人生解釈のパターンになっている。一方、方便と宿世の思いの関係を見ると、源氏においては、仏が、自分の無常を思い知るべき宿世をあらかじめ定めおいた、と意識されており、方便と宿世の思いが結びつけられているのに対し、薫においては、方便が自身の生き方に対する仏の能動的な対応として意識されるようになるため、方便の思いと宿世の思いとは相容れないものになっている。

この『源氏物語』正編から続編にかけての方便の思いの変化は、人間の生を支配する超越的存在についての作者の見方の変化をうかがわせるものであり、人生が宿世の因縁によってあらかじめ動かしがたく定められているというごとき思いとは別途の、より動的でフレキシブルな人生解釈の可能性を開くものである。筆者はこの物語が人間の意志による宿世変更を可能とし

ているという見方を否定したが、それはそれとして、仏の方便という別途の見地から、人間が超越的存在との間に動的な関係をもつ可能性が示されていることには、看過すべからざるものがある。

横川僧都が浮舟にあてた消息にうかがうことができた菩薩の方便の思想も、宿世の思いに緊縛された人間の閉塞的な心理状況を打開するものとして注目すべきものである。このとき浮舟は「憂き身」意識にもとづく自己消却願望から尼となり、我が身を「世に棄てられ」た状態で暮らしているが、僧都はこの浮舟に対し、還俗して薫のもとに帰り、在家の菩薩として方便を行うことを暗に勧めている。作者紫式部の日記や歌集には、方便の思いの明確なあらわれは認められないが、『源氏物語』の終局において、横川僧都という「いと尊き」仏教者に菩薩の方便の思想が託され、その消息において在俗の求道生活の道が示されていることは、作者の理想とする生き方がどのようなものであったかを示唆するものであると言える。

そしてまた、本研究の考察によれば、こうした方便の思想の背景に、『大日経』三句や『大日経義釈』に説かれている密教の思想があることが考えられた。当時密教の修法の隆盛ぶりに比してその教相面での一般の理解は浅く、密教思想の文学への影響は認められないというのがこれまでの大方の見解であったが、本研究はそうした見方への一つの反証を示したことになる。『源氏物語』の思想基盤をなすものとして天台浄土教の思想があることはよく指摘されていることであり、事実そのとおりであるが、『源氏物語』成立当時の仏教界の思想状況や作者の思想形成過程を考えた時に、この物語と密教思想の関係についての考察がほとんどないことは、著しく均衡を欠いた状況であると言わざるをえない。今後、密教、とりわけ天台密教の視点から『源氏物語』を読みなおすことで、さらに新たな知見が得られることを期待したい。

論文審査結果の要旨

本論文は、第1部と第2部とに分れる。第1部は3章からなり、第2部は第1編7章、第2編3章とからなっている。ほかに「序」と「結」が付されている。

「序」で、論者は、まず本論文の課題が、『源氏物語』（以下『源語』と略称）における仏教思想のあらわれ、具体的には仏教思想摂取のあり方とそれに根ざした人生解釈の思考パターン、を思想史学的立場から究明することにあるとする。ついで、その視点・方法に言及して、研究史の問題点を指摘したあとで、無常の思想と宿世の思想と方便の思想、この三者の関連に着目しつつ、あくまで物語の記述に即して、上記の事実を把握しようとする、とのべる。

第1部「物語創作と仏教」では、作者紫式部が物語創作と仏教とをどのように関連づけていたか、が追求される。

第1章「蛍巻物語論における仏法論」では、『源語』蛍巻の、著名な物語論の末尾の仏法論の意味内容を解明しようとする。先行学説を仔細に検討しつつ本文を丹念に読みこんだ結果、この仏法論は「煩悩即菩提」という天台の教理を踏まえて、人の世の真実相と物語の誇張された叙述と（この一見対立する二者）を相即ないし一如の関係でとらえ、もって物語創作の「空しから」ざる所以を説くものだ、と論ずる。仏法論を含む蛍巻物語論の解釈史上、傾聴すべき新説である。

第2章「蛍巻物語論の思想的源泉」では、前章でみた仏法論の思想的源泉を追求し、①この

仏法論にみえる「方等経」は、通説のいう大乗経一般の意ではなく、天台宗の五時判でいう〝方等時の経典〟の意であること、②『法華玄義』の方等時の解説にみられる「一音説法」の教理がこの仏法論のもとにあること、③、②との関わりで、『法華経』薬草喩品の所説も仏法論の典拠である可能性が大であること、を説く。説得力に富む貴重な新所見である。

第3章「狂言綺語観の超克」では、仏法的見地から物語等の文芸は狂言綺語にすぎぬとしてその意義をきわめて低く評価する当時の通念に対し、作者紫式部が仏教の包含する「方便説」を摂取・依拠することによって、文芸ないし文芸創作に意義を見出す見解を形成していた、と説く。これまた、注目すべき見解である。

第2部「仏教思想の表徴」では、『源語』にみられる、仏教思想の摂取のあり方とそれに根ざす人生解釈の思考パターンが追求される。第1編「宿世の思想」では、宿世の思想のありようとそのあらわれを無常の思想との関わりに着目して、とらえようとする。

第1章「宿世と無常」では、『源語』において宿世の思想と無常の思想とが深く結合している諸実例をあげ、この両者の内面的結合を究明する必要がある、と説く。

第2章「宿世の文脈」では、『源語』を含む平安時代の六物語の宿世思想のあらわれを仔細に検討した結果、①宿世の思想は、従来諸家が注目してきた「宿世」「契」などの定型表現とは異なる「宿世の文脈」と名づけうる表現の中にも色濃く示されている、②「宿世の文脈」の、物語における出現頻度は『源語』以降平安時代が進むにつれて高まる、③「宿世の文脈」に着目するとき、宿世の思想は前世の業因が現世の過去・現在・未来という時間的経過の中での物事のなりゆきを持続的にまるごと支配しているという発想として顕現しており、この宿世の業因の支配する幅や深さは、『源語』以後いよいよ大となる、と論ずる。平安時代の宿世思想の展開に関する貴重な新知見といえる。

第3章「宿世と人間の意志」では、『源語』における宿世思想のあらわれの特色を、「捉えがたさ」と「抗いがたさ」とが強調されている点に見出すとともに、研究者の意見の分れる、宿世と人間の意志との関係如何の問題に言及して、物事のなりゆきの決定に人間の意志のはたらく余地を認めつつも、宿世そのものは人間の意志によって変更されるものではないとみなされていたとみるべきだ、とのべる。

第4章「女の宿世」では、『源語』における宿世についてのほとんどの表現を細密に検討した結果、男性登場人物が彼らの運命をいわば単純・皮相的に宿世と関連づけているのとちがい、女性登場人物においては、宿世の思いが、わが身を「憂き身」とみなす、深刻な自己規定を彼女らにもたらしている事実を指摘する。『源語』の宿世思想の、従来未究明の重要な面を剔出した貴重な指摘である。

第5章「『憂き身』と自己消却」では、前章の記述を承けて、「憂き身」意識をより深くとらえようとする。①「憂き世」意識は無常の思いと深く関わり、「憂き身」意識は宿世の思いに根ざすもので、両者は本来別系統の概念である、②「憂き世」意識が出家志向につながるのに対し、「憂き身」意識は、しばしば当事者の自己消却の願望を喚起する（『源語』続編・宇治十帖の描く浮舟の意識と行為とはその典型例だ）と説く。この章の記述もまた『源語』の研究上重要な論点を提示している。

第6章「『憂き身』と『浮き身』」では、前々章、前章の考察を踏まえて、作者による宇治十帖の浮舟の造型に考察を及ぼす。『憂き身』意識と『浮き身』意識とが不可分に結合しているとした上で、宇治十帖の執筆目的は、「憂き身」にして「浮き身」なる――外在的要因によって

さすらい続ける運命を負わされた——女の人生を描くにあった、とする。

第7章「紫式部の『憂き身』意識」では、『源語』の「憂き身」表現を網羅的に検討した結果、女性人物たちの「憂き身」の自覚と自己消却の願望の直接的契機として、他人の眼を気にした恥の意識があることを指摘する。加えて、紫式部自身が「憂き身」意識と自己消却の願望と恥の意識とを抱懐していた事実を指摘した上で、かかる作者の「身意識」が、宇治十帖の浮舟の造型を生み出したとみなしうる、と論ずる。

第2部の第2編「方便の思想」では、『源語』にみられる、仏の方便（衆生を救うために行う特別な手立て）の思想のあらわれを考察する。

第1章「方便の思いの源泉」では、宇治十帖蜻蛉巻の薫の描かれ方を中心に考察した結果、①宇治十帖において方便の思想は、仏が衆生に発心を促すために世の無常を思わせるという形で、登場人物たちによって意識されている、②方便の思想の源泉は、通説のいう『法華経』如来寿量品の方便説にではなく、『法華経』随喜功徳品や『大日経』三句の方便説にあるとみなすべきだ、と論ずる。①②ともに重要な指摘であるが、とくに②は、『大日経』に着目して天台密教の思想的影響を説く点が見落しがたい。この点は、『源語』の思想的基盤を天台浄土教に求めてきた先行諸学説に修正を求めるものだからである。

第2章「仏の方便」では、『源語』正編の光源氏の方便の思いと続編宇治十帖の薫や八宮の方便の思いとの異同を論ずる。共通点として、男性主要人物の思いであること、世の無常を思わせるという形式で仏などによる方便がなされると意識されていること、などをあげ、相違点として、宇治十帖において仏の方便の促しがより直接的に意識されていること、とくに薫において仏の、人間の生き方を高き方へと引き上げる働きが強く意識されていること、をあげる。加えて、正編・続編との間にみられる上記の相違は、作者の正編執筆時の仏観が続編執筆時になって変容したことを意味する、作者に仏観の変容をもたらしたものは、天台檀那流の祖覚運の思想——その仏観であったのではないか、と論ずる。

第3章「菩薩の方便」では、『源語』最終帖の夢浮橋で横川僧都が浮舟に当てた消息の内容に、方便の思想が潜在している可能性を指摘する。『大日経』の注釈書として当時天台宗で用いられた『大日経義釈』にみえる例話——ある菩薩が「大悲方便」として一女性と不邪淫戒を破り、その後折り折りにその女性を勧導し、ついに共に「大法利」を成した、という例話——が、横川僧都の消息（論者はこの消息を、浮舟に在家の菩薩となって（還俗して）、方便を行じて薫と共に成道をめざすことを勧めたものと解する）の下敷きとなっている、との指摘は傾聴に値する。

論者の本編の三章にわたる記述は、『源語』の方便の思想についての最初の本格的な論及として研究史上の意義が大である。

「結」では、それまでの考察の結果をまとめている。

総じて本論文において論者は、『源語』にみられる仏教思想のあらわれ、具体的には仏教思想の摂取のあり方とそれに根ざした人生解釈の思考パターンを究明するという課題を設定し、①宿世の思想、②無常の思想、③方便の思想、これら三者の関わりを注視しつつ考察を進めた結果、これら三者が関連してつくりなす、『源氏物語』にみられる仏教思想のあらわれ、その実相を、深みからトータルに把握することに成功している。論者の示した新知見は枚挙に遑ない。この成果は、『源語』の思想世界の最も本質的な面を新たな形で描き出したものであり、

『源語』の思想の研究さらには平安時代の思想展開の研究の進展に寄与するところきわめて大である。

よって、本論文の提出者は博士（文学）の学位を授与されるに十分な資格を有するものと認められる。